



理事会だより (9・9)

- 一、佃名誉会長著「俳句の岸边」が完成し、本日協会員へ配布出来ることになったと池田会長より披露。予算額を五万円超過した旨山田編集委員長より報告あり承認。(外部機関へ三七部贈呈) なお希望者には協会の一部負担の上五百円にて頒布(山田副会長へ申請下さい。 ☎〇四六五―三四―六五四二)
- 二、秋の吟行会会場はフラワーセンターの視聴覚教室に変更、高点句は短冊にして提供(総務部)
- 三、文化の日俳句大会 ①投句は一七四名二七八組 ②当日参加六五名強見込みでコロナ禍の会場利用制限を勘案し予備室確保 ③当日の注意事項を本号10頁に ④寿齢者表彰品はクオカードへ変更を承認 ⑤大会実施可否、役割分担は十月理事会で審議すること。
- 四、藤田湘子記念小田原俳句大会募集パンフ配布。(大会実行委員会)

「俳句おだわら」10句抄 (649号より)

尾崎竹詩 抄出

試運転してみる農具初蛙
夏暁ゆつくり動く城下町
前方後円墳の扉は固し青葉闇
ひと夜さを月下美人とひとつ部屋
手を洗ふ波待ちにけり雲の峰
押し寄せる四方六千日の傘
松明に風の集まる晩夏かな
粉葉の喉に絡むや半夏生
曖昧な量子の動作半夏生
長ぐつは十四センチかたつむり

杉崎せつ 抄出

幹磨く雨となりたる百日紅
曲るたび山は新たに青あらし
大向日葵強き女の庭に咲く
身の軽くなりゆく茅の輪ぬけてより
傘買ふてうなぎ食ふ間に雨上がる
開け放つ音楽堂や青楓
海霧の去つて貧しきラブホテル
夏暁ゆつくり動く城下町
隣駅見ゆる単線竹煮草
長ぐつは十四センチかたつむり

田中 幸子	岩本ひさみ	北村 文江	池田 忠山	中山智津子	山口安規子	北崎 修	新井たか志	佐々木重満	岡田 典代
足立 和子	豊田 幸枝	菅野 英余	青山 典子	板谷 雅泉	庄司 下載	島 梅乃	岩本ひさみ	一ノ瀬茂代	岡田 典代

二見和江句集『花きぶし』合評

「半分づつ」

長谷川きよ志

『笑むやうに溶けてゆくなり春の霜』

何しろ穏やかで、誰に対しても構えず自然体、和江さんの知と情のバランスは抜群である。掲句は感覚で捉え面白い。気力と体力のある内に句集刊行を考えたという和江さん。これを機に更なる円熟味が増すであろうと期待したい。』と「春野」の奥名春江主宰の句集の帯に載る「序文」により、作者の的確な人物像と作品紹介より始まるこの句集、更にプロフィールに加え折々の作品について鑑賞してみたい。

『花きぶし』は「春野」同人、二見和江さんの第一句集で平成十七年の入会から令和三年までの三百三十五句が収められている。

昭和十九年生まれ。神奈川県山北町出身の和江さんは、小学校の教師であり、ご主人も教職者である。

退職後の解放感が嬉しくて、水彩画やコーラスに加えパターゴルフも始めた。又、義母が俳句を嗜み句集も出していたが、南足柄の情報が無く、小田原市役所で偶然冊子を見て「春野小田原句会」入会した。当時の主宰故黛執先生の教えを受けると共に、その後湯河

原で開かれた俳句入門講座に参加をする。

ざわざわとはか農夫の蒔萩草

まだ色を極めず揺るる花きぶし

竹皮を脱ぐ少年が「俺」と言ふ

入会後三年でこの完成度。南足柄は自然に恵まれ有名な古刹「大雄山最乗寺」はお住まいの近くである。

さくらさくら明日に延ばせる医者通ひ

さて、和江さんとのエピソードをひとつ。世間は広い様で狭い。ある日、私は家内の腰痛の付き添いで小田原市内のクリニックへ。そこに偶然本人のリハビリで来ていた和江さんとはったり。同じく同伴の御主人を紹介された。掲句はリハビリだから、明日に延ばせる医者通い、は納得出来る。

半分づつ味見してゐる青みかん

〈あとがき〉によれば、「句会に出かける私に協力してくれる夫に感謝したい」とある。あのクリニックでお会した第一印象から、半分づつ味見している相手は、見るからに温厚で柔和な感じのするご主人である事は疑う余地もない。

「私の注目した句」

伊藤はる子

ひまはりの影を借りたる立ち話

女性は話好きです。道で会えば長い話になることもしばしば、炎天でも日傘替わりに背の高いひまわりの影を使う。遅しさが感じられます。

民生委員でもあった和江さん、地域の方々との交わりも多く、ご高齢者とのお付き合いも多い。日常の暮らしの中で詠んだ「婆」の句に注目してみました。

夕涼し赤子をかこむ婆の声

旅人を眺めて婆の日永かな

よく変はる婆の話や心太

婆たちの葉見せ合ふ石露日和

一句目、少子化の昨今、赤子の誕生は嬉しい出来事です。皆で喜んでいる光景が浮かびます。

二句目、縁側から外を見ていると旅人が通り過ぎて行った。手持ち無沙汰の婆の様子が伺えます。

三句目、私もそうですが、婆達は自分中心の話が多く、人の話を聞かない。心太の季語が楽しいです。

四句目、年を重ねると病気が増えます。必然的にお薬も増える。飲み薬の数を自慢しあっている景が浮かびます。人にも自然にも優しい眼差しが感じられる句集だと思います。

「私が選んだ秀句」

秋山 昇

まだ色を極めず揺るる花きぶし

春の山野を行くと、花きぶしに気がつきます。私もきぶしの花が好きで穂先が連なり、風に揺れる様は正に春の息吹だと感じます。和江さんの句には周りの人、少女、少年、婆等の係わりや自然との一寸した係わりがリズム良く表現されています。

たんぽぽの点々と野を広げ

海空に大きな鳶の輪風光る

木苺を弁当箱に父帰る

よく変はる婆の話や心太

きらきらと薄氷きらきらと少女

木の芽風少年そつとゆめ語り

ピアスして茶髪が稲架を組んでをり

柿齧る夫少年の顔をして

茶の花のほろほろ雀ばらばらと

草を引く一人になれる時間かな

ひらがなのやうに巻きたるシヨールかな

*

句集「花きぶし」好評発売中。二、九七〇円(送料込)

住所 〒250-0127 南足柄市大雄町一三七二-二

TEL 0465-17418303 二見 和江

気分に浸る

瀧本 敦子

弔ひか黙黙西へ蟻の列

田中 幸子

蟻が「黙黙」と列をなしている。せかせかでもただだでもない。しかも、日の沈む方「西」へ向かうのである。その蟻の列を弔いではないかと言っている。虫の死骸を運んでいるのかもしれない。後ろにそっと参列してどこまで行くのか確かめてみたい。その先を想像したくなる一句。

あじさいの今朝の機嫌のうすみどり 須田 聡子

あじさいに果たして感情があるのだろうか。多彩に色を変化させるあじさいのことだ。きつと感情があるに違いない。そのあじさいの今朝の機嫌を「うすみどり」と色で表現している。しかも、平仮名表記。淡くて柔らかい。これから何かいいことが始まりそうな予感がする。あじさいへ作者の気分も重なる。

梅ジュース瓶ゆすりては梅に問ふ 山田 照子

砂糖へとエキスが溶け出して時間をかけて梅ジュースが出来上がる。途中何度も何度も瓶を揺すつては砂

俳句おだわら (9・19メ切り、到着順)

◆鹿火屋 (8・27)

久江報

母逝けり誘ふ天女の秋扇

足立 和子

髪染むや五感に通ふ処暑の雨

川本 育子

蚕豆の莢より生まる無垢の青

高橋 小糸

鯉二匹水輪鎮もる秋の暮

山崎 悦子

畑佇てば秋暑の刃肩に手に

近藤 久江

◆山北 (8・26)

由里子報

とびとびの記憶つなげし夏の月

和田恵美子

八十を越えたる八月十五日

尾崎 幸子

父がよる紙縋の細さ夏の縁

中山 妙子

名月やモンローウオークで屋根の上

尾崎 竹詩

夫の背に傘差しかける門火かな

石田加津子

ひぐらしや父似の足の指を揉む

竹下由里子

◆みなみ (8・21)

かほる報

炎帝とにらめっこして矢倉岳

飯田 愛

御先祖の真菰に座したその笑顔

小瀬村信子

捨てられぬ足踏みミシン秋微雨

加藤れい子

函嶺の小さき駅や花カンナ

村上 龍山

梨を挽ぐ空を大きくひとひねり

加藤 富江

糖の溶け具合や色の具合を見ながら、もう出来たかと梅に問いかけている。人には聞けないことも問いかけているかもしれない。梅からゆらゆらと染み出すゆつたりとした時間がやさしく応えてくれる。

有耶無耶の雨の日暮や椎の花

芹澤 常子

この句は「有耶無耶の雨」という何だかはつきりしない天気を通して、椎の花のあの独特な匂いに漂うすつきりしない「気分」を詠んでいる。椎の花の色の明るさにその気分もそれほど深刻ではなくなる。この先の雨が止むかどうかわからないけれど、しばらくの間こんな気分浸っているのも悪くない。

コ克蘭を捜しコゲラを見て帰る

出澤 洋子

果たしてコ克蘭を見つけることは出来たのだろうか。コ克蘭を捜しているうちにコゲラを見つけ、その鳴き声や木を突く動きを観察することに夢中になって、コ克蘭を見つけないことなく帰ってきたのではないか。この句は何をどうするという表現だけで出来ている。だからこそ、物語が広がっていく。

初秋や塗り椀つつむ吉野紙

日傘から喜びごとのあふれだす

独り居に合はす暮しや茄子の花

みずからは余命測れず緋のカンナ

ふと思うノアの方舟秋出水

◆青梅(9・8)

幸子報

鈴虫の夜全開の厨窓

大塚 行人

秋燈小さきコックのオムライス

湯本とし子

てにをはに惑ひ黙せばちちる鳴く

神野美代子

夏の果投げ出す足の赤い爪

加藤まり子

鰯雲鯉になじみし畑の土

久保寺トミ子

終バスやまた聞きなれぬ虫の声

田渕 令子

母さんの背中がやさし夜なべかな

田中 幸子

◆沈丁(9・4)

寶子山報

曼珠沙華大正ロマンそのままに

中野 文子

曼珠沙華描くに手まどる眉ひとつ

若村 京子

ありし日の面影ふつと秋彼岸

柳澤ミサ子

的射抜くアーチェリーの矢曼珠沙華

田中 恵一

ゆかた着て踊りし彼の日文化祭

河本 純子

一對の曼珠沙華揺れシャッター音

瀧本 敦子

むらがついても寂しい曼珠沙華

勝木 澄子

豊田 幸枝

市川めぐみ

斎藤 静

加藤 健治

加藤かほる

ほの見えるところ

畠 梅乃

ラムネ振って昭和に返りたり

岩楯恵津子

ラムネは郷愁を誘う飲み物だ。瓶の色、フォルム、味、いずれも懐かしい。特に瓶の中でビー玉がゴロンと当たる音。「昭和に返りたり」という措辞に共感した。子供の頃ビー玉が瓶の口を塞いで上手く飲めなかったことをふと思い出した。昨今はプラスチック瓶のものも出ているようだが、何とも趣がない。

向日葵や負けず嫌ひの肩で泣く

田中 幸子

季語の「向日葵」から夏休みの子供を想像した。人前では決して涙を見せない負けず嫌ひの子。何があつたか、その子が背中を向けて泣いている。泣いている顔は見せないが肩が震えているのだ。そっとしておけば良いのか、抱きしめてやれば良いのか。子供が、そして親が成長してゆく過程だ。

あるがまま生きて今あり豆の飯

山田 照子

「あるがまま」とは、偽らずに、背伸びせずにとい

さんげもん
懺悔文唱へる白き曼珠沙華

親誘ひ古都を散策文化の日

一の字に海の色置く初秋刀魚

いちめんに咲くが本領彼岸花

◆春野(8・15)

きよ志報

ベテランと持ち上げられて貼る障子

内田知江子

夜学の子姐御も居れば悪餓鬼も

秋山 昇

残菓を数へてゐたる夜の秋

伊藤はる子

丸菓のころころ二百十日かな

尾崎 一夫

したたかや御神木へと藪からし

二見 和江

ふつつと寸胴鍋や秋暑し

瀬戸 悠

現世を追はれ追はれて片陰へ

長谷川きよ志

◆香雨・梅ごち(8・22)

忠山報

湯上りの頬にことさら処暑の風

肥後ちさこ

庭摘みの小花を卓に今朝の秋

関戸わよこ

みちのくの黄昏はやき花野かな

青山 典子

兄はまだ二十歳のままで墓洗ふ

門松 鳳文

遠浅の白き砂浜夏惜しむ

吉田 百代

朱の橋の影のゆるがず水の秋

吉田 康雄

よみがへる木の香草の春秋はじめ

陌間みどり

退院がのびてひすがら秋の雨

小澤 純子

うことか。これはできるようで、なかなか難しいことだ。大概是背伸びをして墓穴を掘る。けれどもこの作者には、自分に正直に生きてきたという自負があるのだろう。そんな作者の「今」とはどんな「今」だろうか。「豆の飯」がよく効いている。

有耶無耶の雨の日暮や椎の花

芹澤 常子

雨の降る日は、いつ暮れたかはつきりわからないままどんよりと暮れる。そんな日は仕事もけじめをつけにくい。なにもかも中途半端に終わっていく今日を「有耶無耶」と言ったのだろう。窓の外には椎の花が薄ぼんやりと見える。椎の花の匂いを思えば、一層やるせなさを感じさせる一句だ。

青蜥蜴^とし全力はかくも美し

伊藤 道郎

夏の灼ける石の上を走る蜥蜴の迅さにいつも感心する。まるであの青い残像だけを見ている気になる。この句はここからの転換がうまい。「全力はかくも美し」韻を踏みつつ、蜥蜴のことを言っているようで、人間のことも思わせる。特に今年はオリンピック・パラリンピックがあつたせいだろうか。

鉢植の葉末^{ずえ}にしづく今朝の秋

◆こよろぎ（9・9）

つとむ報

池田 忠山

秋刀魚焼く今宵はれいの呑み仲間

板谷 雅泉

秋すでに木道にある風の彩

植松テル子

草匂ひ土匂ひ立つ秋暑かな

神山つとむ

◆おほる（9・8）

昌男報

早足でオリパラ過ぎて夏の果て

風間 秀泰

身の丈を存分に生き大花野

加藤 春江

色変えて誰を待つのか酔芙蓉

坂入清四郎

あるがまま生きる喜び野紺菊

瀬戸とみ子

言訳に言い訳重ねこぼれ萩

高橋みどり

秋疾風ころこの内を捲りけり

中津川晴江

郷の香をはじき出したる栗の飯

中根登美子

自我を捨て風なすままに秋桜

中村 昌男

花野抜け風の導く童話館

廣田 悦子

大花野吾空になり風になる

二上 光子

三日月や四条畷の五葉松

横塚 昌平

考えることはさておき秋彼岸

石井きよ子

躓いてころんだ先へ秋の声

石井千代子

生きている限り青春大花野

小野 菊土

この道は明日へ繋がる花野かな

香川 花子

老鷺と朝の挨拶交わしけり

◆たけのこ(9・15)

透ける翅とおから蜻蛉棒の先
閑散と三時の湖畔霧流る

栗多き祖母の栗飯母は子に

人気なし厨ですするところ汁

人一人数多数多の赤とんぼ

◆鷹(9・10)

身の内の旅の残暑と帰宅せり

湯の町の明けや川音と野牡丹と

終戦日書庫のどこかに伏せ字本

賢治忌や万年筆の青インク

黒塗りの教科書展や花カンナ

あい吹くや駅に土産を買ひ足せり

耳飾り片方無くし夏終る

雲形定規飽かず眺むる無月かな

淋しさは背中に積もるちちろ虫

老鷺や飯盒に汲む溪の水

白樺に夕日の余映けらつつき

初秋やうすむらさきに浜暮るる

築番に夜来の雨の上りたる

香川 花子

(九月号追加)

悦女報

三木 泰子

久津間百合子

小宮 早苗

徳田 公子

宮崎 悦女

十五報

青木 孝子

西賀 久實

佐宗 欣二

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

庄司 下載

瀬戸 りん

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

翡翠は消え少年の立つ岸边

こほろぎや寝酒の量のふえたるよ

手鏡を持ちて齒みがき夜の秋

仲秋無月透明な食前酒

湯上りに爪切る夜半や鉦叩

蟬声の盛りの底に早雲寺

落鮎を流しにあけるしたり顔

茶室まで伝ふ飛石散松葉

城跡の野面積みなり萩の風

文箱より夫の旅信や盆の月

川竹のはびこる土手や敗戦忌

亡き人の扇子あふぎて匂ひ立つ

雨を待つ農夫の顔や草いきれ

温め酒胡坐は犬の指定席

島に生き島に老いたり葛の花

オカリナに吹く「ふるさと」や秋の浜

朝顔や鏡と話す美容室

父の家屋号油屋椿の実

秋の海結膜炎の眼に深く

家建ちて狭くなりたる稲田かな

少女食ふ石榴の粒を一つづつ

雁の棹連峰天を拡げたり

畠 梅乃

山口安規子

大木 敬子

大島美恵子

北崎 修

田下 昌人

中根 和子

市川 好子

加藤 幾代

高橋 正子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子

小林 環

近藤 絢子

下平 美子

杉崎 せつ

関根 琉子

鳥海 壮六

古屋 徳男

葛の葉の制御不能に垂れにけり

◆実のり(9・16)

柿根性敬老の日に思いたる

爽やかに義足の少女銀メダル

燕帰る浜に大書の大鳥居

交番ににこにこ人形秋日差

◆零(9・16)

身ほとりのもの片付ける秋の夜

元氣よく唄った歌や「山田の案山子」

案山子立つ風を大地をなごませて

秋空を飲み込む湿原苗場山

幸福はほどほどがよい秋の夜

爽涼と山を越え行く送電線

山道に家々建ちて案山子なし

鉛筆に叱られている秋灯下

ホスピスの友に文書く秋の夜

◆草むら(9・19)

ワクチンを打ったと娘小鳥来る

秋澄むや曾孫誕生の動画来る

ハンモックほど杜をゆるがしめ

笑み栗や縄文の宙拡がりぬ

村場 十五

たか志報

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

史郎報

青木たけを

川合 昌子

伊藤 道郎

野川木一路

佐藤 正子

中村 裕子

井上 良子

木村 和彦

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

◆無所属

秋の病室カーテンの林に迷子

大蟬螂鎌振り対峙猫パンチ

穂孕や台風二つ発生す

波と云ふ大蛇ころがすサーファーら

朝涼や拍子木切りの切り揃ふ

耳飾りちらりのぞかせ秋帽子

行事予定九月にvari意も新た

ダイヤモンド富士いいことありそ花野行く

柿の実のふくれ面なる土の上

花槿開けることなき筆筈かな

どんぐりを踏んで無罪としていたり

青鷺に八方破れの夏至きたり

大三日月未明の海が押し上げる

山頂のツアラトウストラや栗の毬

曼珠沙華テールランプは川をなし

瘡蓋や赤とんぼうを糊付けに

蟬螂が口尖らせて可と言った

棘棘のアキノウナギツカミ交差点

夏深む最中の餡のうす緑

未病とう曖昧模糊や星流る

小林永以子

蓑宮 わか

一ノ瀬茂代

木村美千代

出澤 洋子

澤口 文子

鈴木久美子

北村 文江

岩楯恵津子

山田 照子

田畑ヒロ子

穂坂志げる

小澤 園子

瀬戸 正洋

須田 聡子

小島ノブヨシ

大石 雄介

大石 和子

杉山あけみ

山口 千代

岡田 典代

令和3年度小田原文化の日俳句大会

当日の注意事項

日時 令和3年11月3日（文化の日）受付12時より
会場 小田原市民交流センター（UMECO）

コロナ禍において次の事項を確認・ご理解の上ご参加下さるようお願い致します。

1. 会場入室前に検温を実施、三七・五度以上の方は入室できません。予め体温を確認の上お出かけ下さい。
2. 受付で住所、氏名に加え連絡先電話番号を記入して下さい。（1、2は保健所の指導によるもので個人情報情報は流失しません）
3. マスクの着用、手指の消毒の他換気、設備の消毒、三密回避等ご留意下さい。
4. 水分補給以外の飲食は出来ません。（お茶は用意します）
5. 大会開催可否は10月14日理事会で決定し中止の場合のみ連絡します。（事業部）

理事会日程（各月第二木曜日） 11／11 12／9

いずれも木曜日6時より、於けやき

俳句おだわら鑑賞（令和3年6月号）

父の日やドアに踏んばるストッパー 中根 和子
思わず「クスッ」と笑ってしまいました。ストッパーは父上様かはたまた連れ合い様か？。普段は物静かで温和な人柄が変な所で意地を張る、明治・大正の気骨？を感じました。昭和生れの私には昭和は、戦前・戦中・戦後・団塊・それ以降・と分けますが年号が次々と進んだ今の世代の人達には、私が思う明治と同様一括して昭和かも知れません。

平成がしつくり来ない儘令和もストッパーかも。

（小野 菊土）

第3回藤田湘子記念小田原俳句大会

作品募集（一般の部）

募集期間 令和三年九月一日～十一月三十日

出句 自由題二句一組（何組でも可）

投句先 小田原市図書館内 俳句大会実行委員会

小田原市南鴨宮一丁目五―三〇

※小田原市ホームページから電子申請も出来ます。

投句料 一組千円（郵便振替 加入者名

「藤田湘子記念小田原俳句大会」

〇〇一〇〇一八一二六四五三四

※投句の際振替受付票のコピーを同封して下さい。